

尹東柱の詩とその根底にあるもの¹

熊 木 勉²

福岡大学の熊木と申します。座ってお話させていただきます（熊木着席）。本日はお配りしたレジュメ³の流れの順で話をさせていただこうかと思います。尹東柱の詩の変遷を中心としながら、それぞれの時期の尹東柱の詩の様相と、その根底に何があるのかについて、あるいは彼の詩の魅力などを含めて、私の考えるところをお話させていただきます。

最近、国のメンツとか、誇りとか、そうしたことがしきりに表に出てくるようになってきているようで、それに伴って人の痛みとか、個々の生とか、そういうことがいささか軽んじられつつあるのではないかと、そう感じるようになってきています。また、マスコミ、インターネットなどを見ていると、暴力的な言葉や侮蔑的な表現があふれているように感じます。そういうものは人と人との間に壁を築くに過ぎないものであって、決して対話を促すものではない。そんな言葉を目にするにつけ、私などは、尹東柱という詩人が自らのあり方に悩み、葛藤して、最後には愛の世界に至ったような世界、あるいは植民地朝鮮に生きた詩人たちの詩の繊細な言葉を思い返し、あらためて胸に迫って来る何かがあるようにも感じられてなりません。私たちは言葉というものを、もう一度考えてみるべき時代にあるのではないかと思う次第です。

そして、戦争というものについて、私たちはその時代に生きた人々の生き方、生というものをリアルに感じられない、そういう時期になってきているのではないかと、いうことを考えたりもします。戦争というものがずっと遠くなってしまって、戦争といえば、実はあちこちで起きているのですが、日本に住んでいるとどうしても遠く感じられてしまう。そうした中、私たちが尹東柱の詩を読むこと、彼が自らの死をもって、あるいは様々な苦悩の中で自分自身をみつめる態度によって私たちに残してくれたものは、今一度戦争の時代というものを考える契機を私たちに与えてくれているのではないかと、いうことも考えます。その意味で尹東柱の詩は現代的なものです。あるいは視野を広げると、世界中にあふれる葛藤と対立の中で、彼の詩は私たちのあるべき姿勢に「合わ

せ鏡」のように再考を促すものでもありうるのだろうと思っています。

いささか余分なことからお話申し上げましたが、葛藤と対立の時代の中だからこそ、彼の詩を読み返してみることは意義のあることであろうと私は考えています。

ところで、尹東柱の詩を考えるときに重要であると思われることの一つに、暗黒期という時代の中で彼の存在をどうとらえるべきかということがあるように思います。暗黒期というのは、韓国の文学史にしばしば出てくる言葉ですが、概ね1940年代前半期を指します。狭い意味では太平洋戦争期の文学ということができるとは思います。もう少し広くとらえることができるかもしれませんが、文学を自由に発表できなかったという意味での暗黒、詩を書こうと思っても媒体そのものがそもそも少なかった時代。代表的な例で言えば1941年に『文章』『人文評論』という雑誌が廃刊に追い込まれています。そのあと親日的な『国民文学』という雑誌ができますけれども、段々、媒体が少なくなっていくわけですね。そういう時代の中で尹東柱の詩というものをどういう風に考えられるのか。もちろん、彼が公に発表したというのは、大体は暗黒期以前の発表ということになりますし、新聞や雑誌への投稿作品や学内誌などに限られます。あと童謡なんか雑誌に出ています。おおかたは暗黒期に発表されたものではなかったわけですが、ともあれ、彼はこの時代に一定の量の詩を原稿用紙やノートなどに書き残しているわけで、この暗黒期と言われる時代の中で彼の詩をどう考えられるかということとはとても重要なテーマになるであろうと思っています。

私は尹東柱を考えるにあたって、ただ尹東柱の詩だけに集中すると本質は見えてこないのではないかと、彼の詩の表面だけを追いかけると尹東柱の詩の特徴がむしろ明確に見えにくくなってしまっているのではないかと、思っています。彼の生きた時代、とくに1940年を前後する時代、その時代の文学全体の中で尹東柱がどういう位置づけができるのか。そうした広い視覚からの接近が必要なのではないかと常々思ってきました。今日はそういうことも時間の許す範囲で言及させていただこうと思っております。

¹ 本稿は、2017年3月25日に「第二回尹東柱文学講演会」（主催：尹東柱の詩碑を建てる会、於：西南学院大学）として行われた講演記録である。

² 元・福岡大学人文学部教授。現・天理大学国際学部教授。

³ 巻末に当日のレジュメを収録した。当日使用した年譜については既存の単行本を引用したもので、著作権の関係上、ここには掲載しない。

す。

最初に、年譜を見てちょっと確認していただけますでしょうか（聴衆、年譜を見る）。年譜で確認していただいたように、尹東柱は1917年12月30日に生まれております。ですから、ちょうど今年が生誕100周年ということになります。学籍簿では1918年になっておりますが、これは出生届を出すのが一年遅れたためで、実際は1917年生まれとされています。彼は明東村というところに生まれました。旧満州の間島地方、間島省の方になります。父は尹永錫、母は金龍の長男として生まれております。いとこの宋夢奎は尹東柱と同じ年、1917年9月18日生まれでした。

ところで、母親の金龍ですが、お兄さんに当たる人が非常に有名な満州地方の独立運動家でした。金躍淵というお名前ですが、尹東柱の母方の叔父にあたります。この人は朝鮮人が多く住んだ間島地方では、きわめて重要な人物と考えられます。キリスト教の伝導にも尽くし、朝鮮の人々の教育にも尽くした人でした。さらに言えばこの人は武闘派でもありました。というのは、もともと武人だったんですね。武人だったので戦うという意識が非常に強く、民族意識も強い人でした。こういう人が母方の叔父であったわけです。1909年に明東小学校、当時、明東学校と呼ばれたかと思いますが、それから明東教会が作られています。金躍淵の労によるところが大であったものと思います。1910年には明東小学校の上に、中学校もつくられています。中学校は尹東柱が入るころにはもうなくなってしまうのですけれども、ともあれ、非常に民族主義的な色彩の強い学校でした。映画が好きな方はご存知かもしれませんが、1926年の「アリラン」という映画をご存知でしょうか。この映画は監督主演が羅雲奎です。羅雲奎も一年間、明東中学校に通っていたとされています。村の外部からも学生がやってくるほどに、この地方においては非常に重要な学校だったわけです。

尹東柱は、1925年、明東小学校に入学して1931年卒業するまで通ったのですが、この尹東柱の小学校時代は決して平和な時代ではなかったようです。これは思想的なことにも関係してきます。当時社会主義が明東に入ってきていて、それがこの学校に影響を及ぼしたからです。彼は幼い時期、基本的には平和に暮らしたと思います。家族に囲まれてキリスト教的な雰囲気の中で平穏に暮らしただろうと思いますが、穏やかであるはずの小学校時代というのが、実のところはそんなに平和ばかりではなかったとも思われます。学校では、日本語教育も受けなければならなかったし、中国の人民学校になるという経緯もありました。平和であったのは、実のところ、ごく幼い時期のみに限られるもので、おそらくは彼の小学生時代は、周辺状況が揺れに揺れた不安定な時期だったのではないかと私は思っています。

このあと、龍井の方へ移ることになります。中学校に入って、詩作を始めます。1935年には平壤の崇実中学校に転入します。これは秋で、9月に入っております。で、この中学は1936年に神社参拝拒否で廃校になるのですが、お手元の資料の年譜は少し訂正が必要で、尹東柱は学校が神社参拝を拒否して廃校になったあとに学校を辞めたわけではありません。1936年、神社参拝を拒否したアメリカ人・尹山温校長が、日本当局から校長認可を取り消されます。これに対して学生たちがストライキをするわけですね、そんなのは許されないと。なぜ神社を参拝しなくちゃいけないのか。神社参拝をしなかったことでどうして校長の認可が取り消しになるのか。そして、ついに学生たちは自主退学をすることになったわけです。集団退学をします。尹東柱は、この時、一緒に集団退学をしたものと考えられます。ですから、廃校処分になったから尹東柱は辞めたのではなくて自主退学ですね。抗議の意味での同盟退学に加わったということになるかと思えます。

でも、このことは、尹東柱に心の傷を残したようです。せっかく平壤にある名門中学に入ったのに、わずか半年で中退していますから。自ら学校を辞めるわけですが、かなり心に傷を負った印象を受けます。尹東柱の詩に「夢は破れて」(1936.7)という詩がありますが、まさにこの時期に書いた詩です。崇実中学校での学びというものに挫折して夢が破れてしまった自分の心境を書いた、そのような詩であると言えるのではないかと思います。このころに『カトリック少年』に童謡を投稿したり、鄭芝溶の詩の影響を受けたような詩を書くなどしています。

そして、1938年、ソウルにある延禧専門学校に入学します。はじめは寮に入りますが、あとで下宿に移ります。1939年には、『朝鮮日報』や『少年』に詩や童謡を発表します。1941年12月に延禧専門学校を卒業し、詩集を出版しようとしたのですが、それは残念ながら果たすことができませんでした。その後、平沼という日本名に創氏するわけです。渡日するためであったと言われてます。ちなみに、延禧専門学校時代にはケルケゴールを耽読したりもしています。そのあとの経歴としては、まず立教大学に入学し、それから同志社大学に入学しています。いとこの宋夢奎も近く、京都帝国大学にいました。そして、1943年7月、宋夢奎が独立運動の疑いで逮捕され、次いで尹東柱も逮捕されます。翌年2月に起訴、その後、1945年2月16日福岡刑務所で獄死するということになります。

大きくみますと、尹東柱は故郷である明東で小学校に通い、中学校をいくつか転校し、ソウルの延禧専門学校、その後、日本への留学、こういうことになります。ちょっと注目していただきたい点の一つあるんですけれども、1917年生まれで小学校卒業が1931年ですから、おおまか

に13歳まで明東にいたわけですから。そして、彼が1945年に亡くなった時に27、8歳。ということは人生の半分を明東で送ったということが出来るかと思えます。人生の半分は故郷である明東で送り、あとの半分は中学時代、その後、延禧専門学校へ行き、日本に来たという形になるかと思えます。ですから、故郷の意味というのは、人生の半分ですから大きいはずなんですけれども、実は、私を知る限りでは尹東柱が故郷である明東の風景とか明東への思い出とかを詩に残したものは、ほぼない。それに関連するものはないわけではないんですけども。13年間、人生を送ったにも関わらず、自分の故郷、故郷という言葉はたくさん出てきます。うたっていますけれども、具体的に明東とわかる形ではでてきません。明東ということを具体的に意識しながら書いた詩というのはどうも見当たらない。これは、それなりの理由があるのかなと個人的には思っています。彼が人生の半分を送った明東はこの当時社会主義運動が非常に活発な状況にあったわけですから。そうした中で、おそらく尹東柱の家が明東に住むのが難しくなったんじゃないか。比較的裕福な家庭だったので、小作人やいろんな人たちとの関係の中で住むのが難しくなっていたんじゃないか。社会主義の嵐の中で、やむなく村を離れたざるを得なかったのかなとそういうふうに思っています。当時の治安関係の資料を見てみますと、状況としてそういうようなことが見えてくる面があります。実際に、尹東柱が明東から引っ越して、その後、明東に行き来したというのは、私の知る限りでは詩に1編うかがわれる程度なんです。自分が13年間すごした故郷ですので、実際には行ったことが複数回あるのかもしれませんが、あまり行っているようには見えないんです。尹家は明東村を去らざるを得ない状況にあったんじゃないかというのが私の推測です。それだけが理由かどうかはわかりません。別の理由があったのかもしれない。ただ、私の理解では、社会主義の影響が村に及んでくることによって、もともと民族主義とキリスト教が結びついた村であったものが、その共同体というべきものが完全に崩れてしまった。そういう側面があったんじゃないかと考えています。このあたりは、あくまで私の理解ということでお考え下さい。

年譜を簡単に確認だけさせて頂きました。早速、詩の方にいらさせていただきます。大きくは3つの時期に分けてそこから何を見ることが出来るかを考えていければと考えております。

一番最初は習作期ということになりますが、この時期は、外部に対する違和感をうかがわせるということが言えるんじゃないか。また、主にこれは崇実中学時代、あるいは光明中学校の時代にも該当するかもしれませんが、自由に対する希望もうかがえると思えます。まずは、

この習作期の詩を確認してみたいと思います。

彼の詩は1934年12月に3つの作品が書かれています。彼の詩作の出発点には、外部に対する、つまり社会や状況に対する違和感がうかがえるように思います。「明日はない—幼な心が訊く」という詩をお持ちしました。

明日 明日 と言うので
訊いたら
夜 眠りにつき 夜明けがきて
明日という

新しい日を探していたほくは
眠りから醒めてみると
その時は明日ではなく
今日だった

はらからよ！
明日はないのに

.....

「明日はない—幼な心が訊く」(1934.12.24)⁴

こういう詩です。明日というものを希望しているにもかかわらず、その明日というのを見つけれないでいる。

ところで、この明日という詩語は実は尹東柱の詩の中でかなり一貫して出てくる表現と申しますか、テーマと申しますか、そういう面があると思えます。一貫したモチーフという点ではこの詩には興味深いところがあります。例えばこの詩には「幼な心が訊く」という副題がついています。尹東柱は童謡をたくさん書くことになりすけれども、童心がこの詩からすでに反映されています。習作期から最後に至るまで彼は自らの幼な心ということを常に大事にしていた詩人であると言えるかと思えます。それから、「新しい日を探していたほく」とありますけれども、彼は一貫して新しい時代、新しい日を待ち続けていたと言えるものと思えます。この時期からすでにこういう言葉が出てきているわけです。ただし、一方で、彼は外部とはどうにも調和できないでいる。共感できないでいる。自分と外部との間に何らかの間隙が生じていることを、別の詩までも含めて感じる事ができるわけです。

これは先ほどの話とつながりますけれども、幼いときに尹家は明東村を離れたなければならなかったというのが私の理解です。それによって彼は傷ついていたのではないかと申し上げました。大切であった故郷を失ってしまったという意識が、おそらく彼に強くあったのではないかと思います。彼は喪失感を覚えるほどに、外部に対

⁴ 本講演では、「母」「星を数える夜」「序詩」を除いて、日本語訳は伊吹郷訳『空と風と星と詩』（影書房、1984[2010]）による。

する違和感を感じざるを得なかった。私としてはそういうふうな印象を持っております。それから、先ほど少し触れました自由への希望という点ですけれども、これについては「雲雀」いう詩を見てみることにします。

雲雀は早春の日
じめじめした裏街が
いやだったのさ。
明るい春の空、
軽やかに翼を広げ
艶めかしい春のうたが
好きだったのさ、
けれど、
きょうも穴あき靴を引きずり、
身軽に裏街へ
稚魚のようなおれはさまようが、
翼も歌もないからか
胸が苦しい。

「雲雀」(1936.3 平・想)

この詩は末尾に記されている通り、平壤で構想されたものかと思えます。ここに見られる言葉に「翼」というのがあります。「翼」。彼は軽やかに「翼」を広げているひばりに目をやり、自分を「稚魚」に例えるわけですね。自らを「稚魚」と例えつつ、翼がない、歌もない、と言っています。そして胸が苦しいと。「翼」が欲しい。つまり、もっと自由にと申しますか、自分がやりたいことをやり、表現したいことを十分に表現できるような、そういう希望を持っていたように思えます。しかし学生である彼はそのような状況に置かれていなかったし、彼自身がまだ安定した詩作の段階には至っていなかったと思えます。さらに言えば、「翼」というのはもう一つ、自由への希望だけではなくて故郷への思いもあるのではないかと私は考えています。彼は平壤にいましたので、やはり家族のいる家が恋しいわけです。だから「翼」が欲しい。「翼」で飛んでいきたいという気持ちがあったのではないかと。この詩で彼の希望となったのは「翼」、つまり「鳥」になるわけですが、一方で自分を「稚魚」としていることは興味深いところです。空に飛ぶ鳥と水の中の魚。対立的なイメージですが、こういう対立的なイメージは、尹東柱の詩ではそのあとの作品でも、あるいはその前の作品にも出てくる尹東柱の表現方法の特色の一つといえると思えます。彼の詩の多くがこうした対立的な表現を用いています。そして、彼自身、「稚魚」というほどに、まだ未熟であることを自覚していたと言えらるかと思えます。

彼が中学校時代に作った詩には、おおむね、こうした外部に対する違和感がみられるということ、それから自

由に羽ばたきたいけれども、それができないもどかしさ、あるいは故郷へのなつかしき。自由というモチーフは平壤にいるころにとくに見受けられるんですけれども、大きくは外部への違和感と「翼」の希求。こうした傾向が見受けられそうです。そして、先ほど申し上げたように、この時代の詩には彼の人生最後まで詩の一定のパターンというのがすでにほぼあらわれているとも言えるわけでした。

次に、童謡の方に入らせていただきます。童謡を尹東柱はいくつも書いているわけですが、尹東柱の書く童謡には二つの性格があるように感じます。一つは、童心そのものを扱うものです。これは鄭芝溶の影響もあるのだろうと想像はしています。彼は鄭芝溶の影響をかなり受けていました。大体、童謡というのは、いくつかのパターンがあって、例えば、大人が子供向けに教育的な立場から書いた童謡が一つ。あるいは実際に「子供が書いた詩(童謡)」というのもありうるでしょう。でも、尹東柱が書いたのは、別のタイプの、つまり童心でもって書いた詩、別の言い方をすると、成人が書いて、またそれを成人が読んでもおかしくない詩、そういう詩を書いたと言えるかと思えます。成人が読んで違和感のない童心そのものを扱う詩(童謡)を、彼は書いたわけです。

先ほど、彼の童謡の性格が二つあると申し上げましたが、もう一つは、もう少し時間が経つと、社会の矛盾なり、生活に苦しむ人たちなり、人々の現実を見て接していく中で、童心の中に、例えば「ひまわりの顔」が典型的かと思えますが、働いて帰ってくる人たちの苦勞や、貧しさだとかといったような側面をうかがわせるようになってきます。結局、初めは童心そのものを描いていた詩が、やがて社会性をうかがわせる童謡へと移っていく傾向をみせるようになったということになるかと思えます。

こうした二つの性格が見受けられるものと私は理解していますが、尹東柱の童謡の魅力は、おそらくは、童心そのものに根差した詩であれ、社会性を一定程度反映した詩であれ、対象を日常的なところから切り取っているところ、日常の断面をそのままに生き生きと描くところにあるように思われます。

一方で幼児退行の要素があるという面もあるかもしれませんが。この幼児退行の話をする前に少し申し上げておきますと、言うまでもなく、童謡というジャンルにも個性があります。当時尹東柱も好んで読んでいたと思えますが、^{ソクチョン}尹石重という童謡詩人がいましたけれども、尹石重の童謡は、先ほど申し上げたような大人が子供向けに書いた童謡、大人が子供のために書いたということを目で感じさせるような典型的童謡という印象を受けます。あるいは、^{カンソクチョン}姜小泉という童謡詩人をご存知の方も多いと思えますが、この方の童謡を見ると、どこかに哀しみがあつたりとか、あるいは故郷を切なく歌っていたり

だとか、そういう童謡があるわけです。童謡と一口で言っても、作者によって一定の個性があるわけです。そこで尹東柱なりの個性というものも、童謡の背後に浮かびあがっていると思うわけです。その個性は何と言っても先ほど申し上げたように何気ない日常の一こまを童心によってスケッチして描くところにあるものと私は思っています。

では、その根底に何があるのか。私は幼児退行という側面があったんじゃないかと考えています。実はこれを言ったのは私が最初ではありません。1960年代くらいだったと思いますけれども、金烈圭という先生も、尹東柱はそもそも幼児退行の側面があったという論文を書かれています。ですが、その論文が書かれてからそれに賛成する人はほぼいませんでした。同調する人はほとんどいなかったと思います。こうした見方に批判的な論文を書いたのが金興奎先生でした。決して幼児退行ではない、大人としての童謡を書いたのだと。また、それが定説として受け入れられて、幼児退行という見方は退けられてきた面があるかと思っています。私としては、大人としての童謡を書きつつも、幼児退行という面は決して否定できないと考えてきましたし、いくつかの論文で尹東柱は幼児退行の傾向があったと言及したことがあります。おそらく、幼児退行の傾向について書いたのは金烈圭さんの後はそう何人もいないんじゃないかと思いますが、私もそちらの立場になるわけです。今は以前とは逆に、幼児退行の傾向が指摘される論文もそれなりに出て来たように思います。

そういうことを前提としながら、もう一つ、資料を見られればと思います。童謡に「便り」というのがあります。

姉さん！
この冬も
雪がどっさり降りました。

白い封筒に
雪をひとつかみ入れ
文字も書かず
切手も貼らず
純白のまま
便りを出しましょうか？

姉さんが行かれた国には
雪が降らないから。

「便り」(1936.12 推定)

これはまさに、童心でもって、姉をうたっている詩です。ちなみに、尹東柱の弟さんが書かれていたと記憶しますが、実際に、尹東柱にはお姉さんがいたようではあ

ります。どういう形で亡くなったのか、あるいは死産だったのかどうか、正確には分かりませんが、お姉さんがいらっしやっただということを何らかの文章で目にしたことがあります。とすれば、その姉に対する何らかの思いがもしかしたらこの童謡の背景にあるのかもしれない。もう一つ、「犬」という詩を引用しておきました。これも、童心そのものをうかがわせる詩だと思います。この詩は私が尹東柱の詩の中で一番好きなものでもあります。

雪の上に
犬が
花を描きながら
とび跳ねる。

「犬」(1936.12 推定)

私は、この翻訳の「とび跳ねる」という表現がどうも好きではありません。私だったら、花を描きながら「走るよ」「かけるよ」というふうに訳すかと思っています。とび跳ねると、どうもピョンピョンとび跳ねるみたいで、私は「走るよ」「かけるよ」程度に考えています。いずれにしても、まさに日常的な場面、風景をそのままに切り取っています。きれいな詩だと思います。さらに犬の足跡を花にたとえているわけです。雪に刻まれる犬の足跡が花で描かれる。雪は白いですよ。そこにつけられた足跡が花なのですから、花の色がイメージされる。この雪の白と、春に咲くであろう花の色が絶妙な調和を醸し出している。犬が走っている動的なイメージも面白いと思います。雪が降り積もった静かなイメージ。その上を犬がかける光景。これは、非常に短い詩ですけど、うまく構成された詩だなと個人的には思っています。

先ほど申し上げた、幼児退行の話に戻りますけども、「母」という詩があります。訳としては「母さん」と言ったほうがいいのかもかもしれません。私が訳してきました。この詩は、本来は尹東柱はバツ印、ペケをつけているもので、発表しないつもりでいたものということで、本当はこういう場に出さない方がいいのかもしれない。詩集にも入っていません。写真版詩集にしか入っていないものです。あくまで参考までに紹介しますと、こういう詩です。

母さん！
乳をふくませ この心を慰めてください。
今夜 しきりに哀しくなります。

この子はあごにひげが生えるほどに
何を食べて育ったのでしょうか？
今日も 白い拳が
口にそのままにふくまれます。

(以下省略)

「母」(1938.5.28)

というようなことを書いているわけです。この作品は、自分でもやはりよくないと思ったのかバツ印をつけているんですね。もう少しあとが続きますけれども長いので省略させていただきました。こういう詩を読むときに、尹東柱は童心を常に持ち続けた詩人であったし、成人にも読める童謡を書いたわけですが、一方でこの詩にはっきりうかがえるように幼児退行とも言うべき側面がやはりあったと思わざるを得ないわけです。おそらくこれは想像ですが、彼が明東村を出て以降、故郷のない不安定な状況で生きなければならなかった、その内的な傷あとも関係するんじゃないかと個人的には考えています。故郷を喪失した中学時代を送り、そのまま京城へと向かった彼の率直かつ不安定な内面を、部分的にうかがわせるのではないかと思います。

彼が童謡を書く契機というのはおそらく複合的な要素があったんじゃないかと思います。童謡を書いたのは鄭芝溶の影響もあったでしょうけれども、さらに別の要素をあげると、彼は崇実中学校で童謡を書いています。崇実中学校では教会活動もあったんですね。平壤にボンスリという場所があったんですけれども、そこに教会があって、日曜学校で子供たちにいろんなことを教えていたんです。尹東柱もそれに参加していたようです。その教会で子供たちに接する中でイメージしたり教えたり、そういう中で尹東柱は童謡を書き始めたのではないかと。それから、当時、文壇では童謡に関する評価がかなり高かったという点も念頭に置く必要がありそうです。文学として小説とか詩とか評論とかというのは、当然ながら重要なものですが、童謡もこの時期とても注目されていました。文学史で童謡といえば、現代ではどちらかと言えば本格的な文学という感じであまり扱われない傾向にあるようにも感じますが、この時代は、例えば新聞の新春文芸欄に童謡欄があったりもしました。童謡というのがとても重要視されていた時期でもあったわけです。そういう面があって尹東柱も関心があった可能性はあるのだらうと思います。もちろん、何よりも彼自身が幼な心、子供の心を大切に思っていたというのがもっとも大きいのだらうと思います。

ここで、大きな流れを整理しておく、まず習作期には外部世界と馴染めない尹東柱の姿があって、自由を求める尹東柱の姿があります。それから子供心を描く童謡を書くことになる。ここまでをお話してまいりました。その後どうなったかですが、外部との関係における内的葛藤、そしてその葛藤を克服していく様というのが尹東柱の詩に反映されたように思います。この内的葛藤の時期は、延禧専門学校のころに該当します。延禧専門学校の詩にも変遷があって、延禧専門学校に入った時期

は詩が明るいですね。入学して希望を抱いて新しい道を開拓しようとする感じと申しましょうか。こうした比較的明るい、肯定的に前を見ようとする側面がうかがえる詩が、一年生の秋以降になってくると、あたかも周りの現実が視野に入ってきたような感じで変化を見せるようになるんですね。そして一年生の秋以降、民族のことや、果たして自分の態度はこれでいいのかという、自分のあり方への懐疑を持つに至る葛藤の展開を見せるようになります。大体、童謡は延禧専門学校一年生くらいまで書いています。そして一年生の秋くらいから民族のことに関心が向かうことになる。つまり、外部への違和感ではなく、むしろその外部に直面していくために自分はどうあるべきかを考えるようになったということです。そして二年次、三年次のときのさらなる葛藤の時期へと入っていくことになります。もう少し、具体的にみてみましょうか。ここに、「悲しい同族」という詩を引用させていただきます。

白い布が黒い髪をつつみ
白いコムシンが荒れた足にかかる。

白いチョゴリ・チマが哀しい躰をおおい
白い紐が細い腰をきゅっと締める。

「哀しい同族」(1938.9)

この詩は朝鮮民族の白のイメージをうまく生かしながら、民族の苦難を巧みにあらわした詩ということが言えると思います。この作品は、一年生の九月に書かれています。だいたいこのころから社会や民族といったことに目覚めて、外部現実との対面をなしていったわけです。習作期のときは、あくまで外部に対する違和感でした。違和感にとどまって、その対象に直接に直面しようとはしなかったわけです。外部のことを否定的に描くとしてもそこにどう立ち入っていくかの苦悩までには至らない。でも、この時期になってくると、まさに外部への視角が見え始めるわけです。この詩で言えば、朝鮮の白のイメージを用いながら、人々の生活あるいは生活感情に一步立ち入って、現実を描こうとするわけです。そして、そこから自分の姿勢はどうあるべきかという問いかけへとつながっていくわけです。

こうして、外部との対面の時期、葛藤の時期に入っていくわけです。自分はこれでいいんだらうか。こうやって学校に通わせてもらっているけれども、もっと苦しんでいる人たちがいるじゃないか、といったような葛藤です。延禧専門学校時代でも、二年生、三年生の時代は彼の書いた詩はかなり少ないです。一気に詩の数が減るんですね。おそらく、悩みがあったのでしょう。自分の文学の方向性というものを今一つ確立できていなかった。

どういふ詩を書いたらいいのにかに悩んだように個人的には感じます。ただ、文学への関心を失っていたわけではありません。同人誌を発行しようとしていたという記録があるからです。詩の合評会などもしています。少なくとも同人誌をつくろうというほどに意欲があったわけです。尹東柱は自分の態度、どういふ文学を志向すべきかということに苦悩するわけですが、しかし尹東柱は苦悩はしつつも、絶望というものはしていなかったんじゃないかと私は考えています。「慰勞」と「病院」という二つの詩があります。1940年の詩ですけれども、3年生の時の詩でしょうか。詩をレジュメに引用していませんけれども、「慰勞」という詩は、蝶が蜘蛛に引かれるんですね。蝶が蜘蛛の巣に引かかった様を描いています。そして自分が年にまさる苦勞をしてきたこと、病んだ自分には蜘蛛の巣を払うことしか慰勞のすべはなかったと書いています。「病院」という詩では、医者から自分に病気はないと言われて、「この試練を耐えなければいけない」というようなことを書いているんです。これも1940年に書かれています。「慰勞」という詩と「病院」という詩はセットになっている詩と言えるものです。

今申し上げた、絶望していないということはどういふことかと申しますと、これは私の解釈ですが、この二つの作品、とくに「病院」はキェルケゴールと関係しているんじゃないかと思っています。医者はあなたには病気がないと言ひ、自分にはそれが試練なのだと言っているわけです。耐えなければならぬと言ひ。分かりにくい詩なんですけれども、医者キェルケゴールに当てはめると、私はこの詩の意味がストーンと腑に落ちるようなところがあります。キェルケゴール式に言へば、「死に至る病」というのは何かというと絶望です。キェルケゴールがいうには絶望こそが、死に至る病であるわけです。その意味で言へば尹東柱は絶望していない。いくら苦悩していたとしても、絶望していないということ、それを、自分のやるべきことを模索する過程にあった尹東柱は試練として受け止めたのかもしれない。

葛藤の時期に書かれた「自画像」という詩を持ってきました。1939年9月の詩です。この詩については皆さんよくご存じかと思いますが、さっと流して読んでいきます。

山の辺を巡り田圃のそば 人里離れた井戸を
独り尋ねては そっと覗いて見ます。

井戸の中は 月が明るく 雲が流れ 空が広がり
青い風が吹いて 秋があります。

そして一人の男がいます。
なぜかその男が憎くなり 帰って行きます。

帰りながら ふと その男が哀れになります。
引き返して覗くと男はそのまゝいます。

またその男が憎くなり 帰って行きます。
帰りながら ふと その男がなつかしくなります。

井戸の中には月が明るく 雲が流れ 空が広がり
青い風が吹いて 秋があり
追憶のように男がいます。

「自画像」(1939.9)

狭い空間である井戸の中に月が明るく、雲が流れ、青い風が吹く。色彩感覚、空間意識が非常に優れている詩だと思ひます。伊吹郷さんの訳をそのまま使わせていただきました。井戸の中に月が見えるということですから、背景となる時間は夜ですよ。でも、青い風が見えるはずもありませんし、夜の井戸で雲もなかなか見えにくいはずですよ。このようにイメージが工夫されて美しい情景が描かれるのは、尹東柱の詩の一つの特徴だと思ひます。そして、井戸の中には自分がある。そこには自然が映っているわけですが、これは尹東柱が克服しなければならなかった過去の自分の内面世界をあらわしていると思ひます。過去の世界、美しい世界、自然の世界。雲が流れて、青い風が吹く。しかし、自分はそこに写ったその男が憎いというわけですよ。離れなければならぬと思ひた過去の自分。その自分を憎く思ひもし、それでも自分が哀れになって、また井戸に戻っていったりします。葛藤ですよ。過去の自分を克服して社会と対面しなければならぬ。外部に向かって何かをしなければならぬ。でも、捨てきれないんですよ。それは、自己の根底にある幼な心であり、自然の世界、美しいもの。そういう心の根元にあるものを捨て去ることができないわけですよ。自分の感性が狭い井戸の中にあるのは分かっているんですけど、そこから離れられない葛藤がついて回っているわけですよ。そんな中で、1941年、春ぐらいには彼は自分の使命や自分が進んでいくべき方向を見つけたように思ひます。これが彼の詩世界の確立期といえるように思ひます。具体的には延禧専門学校四年生の時代になります。このころの作品として「十字架」という詩を持ってきました。

追いかけてきた陽の光なのに
いま 教会堂の尖端
十字架にかかりました。

尖塔があればほど高いのに
どのように登ってゆけるのでしょうか。

鐘の音も聴こえないのに
口笛でも吹きつつさまよい歩いて、

苦しんだ男、
幸福なイエス・キリストへの
ように
十字架が許されるなら

頸を垂れ
花のように咲きだす血を
たそがれゆく空のもと
静かに流しましょう。

「十字架」(1941.5.31)

こういう詩です。ここにうかがわれるのは許されるものなら自ら犠牲になろうという犠牲意識であるわけですが、それは言い換えると使命感でもあるのだらうと思います。ちょっと注目したいのは塔です。「尖塔があれほど高いのに」。つまり、自分をその下においています。教会の塔の先はずっと高いところにあって自分はこの地にあるというわけです。本来の理想は天にあるわけですが、自分のやることは地上にある。地上にいて、やれることをやっていくという姿勢がこの十字架に見られるんじゃないかと思います。「尖塔があれほど高いのに/どうやって登ってゆけるのでしょうか」。つまり、登っていくことよりも、自分は地上で「口笛でも吹きながらさまよい歩いて」いくことを選択します。犠牲となることを決して避けることなくです。一見軽い感じのように読めつつも、結局彼がしようとしたのは、あくまで地上に足をつけて地上の人たちと苦悩を分かち合いながら一緒にやっていく、という姿勢だったんじゃないかと理解しています。そしてこういう意識と通じているのが「序詩」です。これが彼が至った最高の境地であったと私は思っています。「序詩」の方を見てみたいと思います。

死ぬ日まで天を仰ぎ
一点の恥なきことを、
葉に吹きおこる風にも
わたしは心痛めた。
星をうたう心で
すべて死にゆくものを愛さなければ
そして私に与えられた道を
歩き行かねばならない。

今夜も星が風にかすめられている。

「序詩」(1941.11.20)

この翻訳は私が伊吹郷さんの訳をちょっと変えて訳したものです。この詩は、言ってみれば死に行くものすべ

てを愛さなければという愛の世界ですね。そして自分の与えられた道を歩いて行かねばならない。四年生の冬になってこの境地にいたるわけです。おそらく尹東柱が自分の詩の世界をどういう方向に向けるか、どういう姿勢を詩に示していくか、その最終的な答えを確立したのがこの詩なのではないかと思っています。

繰り返しますと、ソウルに来ていろんな人たちに会い、周辺の貧しく必死に働く人々のためにどうすべきか、そうした意識を持ち始める中で段々現実への認識が芽生え始める。そして、自分の態度をどうすべきか、自分はどうのような文学をやったらいのかに悩む。しかし絶望したわけではない。自分のやるべきことをやろう。しかも、地上に足をしっかりつけて自分のやるべきことをやろう。そして最後に至ったのが愛の世界だったわけです。こういうことが尹東柱の詩の流れとして言えるんじゃないかと思います。

一つ引用しておきますと、ウォルド・フランクという人の文章を尹東柱がメモしたのがあります。尹東柱が「眠れない夜」という詩の原稿用紙にメモしたんですが、日本語でメモしてあります。「美を求めれば求めるほど、生命が一個の価値であることを認める。何となれば美を認めることは、生命への参与を喜んで承認し、生命に参加することに他ならないのであるから」。尹東柱は観念的な救い、神様への祈り、そういう方向よりは、人々とともにあろうとする、生命に参与しようとする、そういう側面が彼の詩にうかがえる特徴といえるのではないかと思います。ウォルド・フランクのこの言葉を彼自身が日本語でメモしたのも共感するところがあったからでしょう。

時間がなくなってきましたので、少し駆け足で簡単に大きな流れだけを話してきました。あとは、尹東柱の詩の魅力と申しますか、彼の詩がなぜ美しいのか。そして1940年代の話をちょっとさせていただければと思います。これについては皆さん感じ方がそれぞれ違うと思います。尹東柱の詩は美しいでしょうか。美しいかどうかと言われると私はすぐには答えが出てこないんです。なぜかという、彼の詩は常に思索の詩であるということです。自分を一生懸命見つめようとしたり、葛藤したり、そういう詩が多いんです。あ、きれいだなという感じはあまり強くはないかと思います。童謡なんかはやはり感じ方は違いますけれども。さきほど私が好きだといった「犬」などは、一つのスケッチを切り取ったようでも美しいんですけども、一方でどうでしょう。美しさということとは少しニュアンスが異なりますが、彼の詩の魅力ということで言えば、自分を見つめるその姿勢、つまり外部現実に出会ったときに葛藤するその姿や自分のあり方を求める姿勢、そういうところに彼の詩の魅力があるんじゃないかと思います。その一方でここに引用した「少年」も、私が美しいと思ってる詩の一つです。

読むと時間かかりますので、さっと目をお通しください。

そこここで 紅葉のような悲しい秋がほろほろ落ちる。
もみじの散った痕ごとに春の支度をととのえ 枝の上に
空が広がっている。静かに空を見やれば 眉が水色に染
まる。火照る頬を両手でなでると 掌も水色に染まる。
もう一度掌を凝視める。掌の筋には澄んだ川が流れ、澄
んだ川が流れ、川の中にはいとしくも悲しい顔—美しい
順伊の面差しが泛ぶ。少年はうっとり眼を閉じてみる。
なおも澄んだ川は流れ、いとしくも悲しい顔—美しい順
伊の面差しは泛ぶ。

「少年」(1939)

紅葉の秋、水色とか、空の色とかの色彩感覚。また、
手のひらの筋に川が流れる空間、つまり空から手のひら
へと入り込んで、その向こう側に川を見る空間意識があ
るわけですよ。空間が重層的になっていて尹東柱の詩
の魅力が典型的にあらわれた詩だと思えます。私は尹東
柱の詩で何が好きかと言われたら、この「少年」や、あ
るいは「犬」という詩が好きだということが多いです。
とてもきれいな詩だと個人的には思えます。あと、「星
を数える夜」をあげさせて頂きました。長い詩で、これ
も時間の都合上、読むのは避けさせて頂きましても、星
一つ一つに名前を付けていくわけです。この詩も私はと
ても美しい詩だと思えます。リルケの詩を尹東柱はいろ
いろ読んだ訳ですが、リルケにもこういう世界がありま
す。たとえば、自分が大切に思っているもの、その記憶
が遠く感じられるということ。皆さんもそういうことが
あると思えます。リルケは手紙の中で、自分が大切に思
っているもの、それが遠く感じられるということを喜び
なさい。自分が大切に思っているもの、愛しているもの
を遠く感じられるということを喜びなさい。それは、あ
なたの内面が大きくなったこと、あなたの世界が広くな
ったことを意味するのだ、というような内容のことを書
いています。「星を数える夜」は、何やらそうしたリルケ
の世界観を思い出させるような詩のように思えます。尹
東柱がこうやって星一つ一つに名前を付けていく。名前
を付ける中で彼はすべてを包容しているわけです。過去
を懐かしいとただ歌っているんじゃなくて、すべてを
自分の中に包容していて、言ってみれば彼の心はそれ
だけ広がっているように見えるわけです。広い空間に自
分の記憶をちりばめて、それをすべて包容する。思念
の広がりと申しましょうか。そうしたものが見えるよ
うに思えます。

最後に、あと少しだけ、文学史的な意味として1940
年代のことを少しお話させて頂こうかと思えます。1940
年代、よく言われることですが、ハンゲルが禁止され、
ハンゲルを使ってはいけないうちに置かれていたと

言われますけれども、決してそうではありません。ただ
やはり限界はありました。日本語使用というのが太平洋
戦争下では前提でしたし、日本語で話さないといけな
いという空気や教育も学校などではあったことでしょう。
しかし、一方でハンゲルで雑誌が出ていましたし、新聞
も出ていました。ハンゲルの使用が全くダメだったとい
うことはありません。詩集も出ていました。1940年代前
半期に出版されているハンゲルの詩集というのは、私が
ちょっと数えたことがあるんですけども、たしか20冊
以上はあります。ハンゲルで出された詩集ですね。です
から、詩集も出せないわけではなかったんです。ただ、
お金が大変です。紙がありませんからお金がかかります
し、内容的にも当然ながら検閲が入ります。内容的に出
版に厳しい制限があったのは事実です。ただハンゲルが
全く禁止されていたわけではない。では、まわりの詩人
たちはどういう詩を書いたかということです。尹東柱が
詩を書いていたときに文壇ではどんな詩が書かれていた
のか。それを見ることで尹東柱の詩の特徴や意味が見え
てくるのではないかと思う次第です。

とりあえず、金光均キムグンギョウの詩、呉章煥オジヤンファンの詩、それとこれは
日本語で発表されたものですが、金鍾漢キムジョンハンの詩を持っ
てきました。これらを紹介させていただこうと思えます。
金光均の「長谷川町に降る雪」は、1941年8月に発表さ
れたものです。この長谷川町は、だいたい今のソウルの
ロッテ百貨店の裏あたりです。朝鮮ホテルとかがある方
向です。

茶店ミモザの屋根の上に ホテルの風速計の上に
傾いたポストの上に 雪が降る

波打つ屋根たちのひと端に聴こえていた
遠い騒音の湖が眠ったあと
湿った汽笛だけが時々聴こえ
その上に
古いフィルムのような雪が降る
×
この道をゆけば昔にでも帰るかのよう
に灯りがやさしい
その灯りの上に雪が降る
見れば見るほど白い雪が
からのポケットに手をつっこんだまま
私はだまって雪に降られる
降る雪がささやく

昔にゆこう 昔にゆこう

金光均「長谷川町に降る雪」(1941.3)⁵

こうした詩も1940年代の詩です。ハンゲルで発表され

ています。もう一編、呉章煥という詩人なんですが、「羊」という詩を持ってきました。これもハングルで出されたものです。1943年に『朝光』という雑誌に発表されたものです。実は呉章煥という詩人は日本語でも詩を書いたことがあって、日本語ができます。作品を書く程度に日本語ができたんですけれども、彼が日本語詩を書いたのは1930年代半ばのことで、1940年代に入ってから日本語で詩を書いているわけではありません。日本語創作への要望が厳しくなればなるほどむしろ書かなかったと言えそうです。そして結局、彼は1943年の「羊」でもって完全に筆を折るんですね。一切の詩を書かなくなる。解放後になってから新たに詩を書き始めるわけです。彼が戦前に書いた詩としては、私が知っている範囲では彼の最後の詩です。こういう詩です。

羊よ、幼い羊よ
紙をあげよう
どうしてお前まで
動物園にくらすのか。

羊よ、幼い羊よ
やわらかいお前の毛は
雪のよう
芝もない
寂しい木柵の中で

羊よ、幼い羊よ
お前はなにをおもうのか。

羊よ、幼い羊よ
紙をあげよう
送るあてもなく
ただ慕わしく書きつけた手紙

羊よ、幼い羊よ
泉のように澄んだ目
葡萄のつぶのようにきれいな目で
私も見てごらん
粗末な木柵に寄りかかって
羊よ、幼い羊よ
お前まで何をおもうのか。

呉章煥「羊」(1943.11)⁶

1943年ですから、太平洋戦争下の詩です。彼はこの詩でもって筆を折るわけです。

もう一つ、日本語で書かれたものも参考になるかと

金鍾漢の「待機」という詩を持ってきました。この詩は、実は総督府に近い人たちから絶賛された詩でもあります。これからの詩人たちはこういう風にかかなくちゃいけないという評価も得ていました。日本語で書かれましたし、内容的にも政策に一致すると理解されたんでしょう。ただ、そういう風に時局に迎合して描いたものかどうかは疑問です。こういう詩です。

雪がちらついてゐる
しんみりしづかに 雪がちらついてゐる
そのなかを ききとして きみたちは
いもうとよ またいとこよ おとうとよ
まなびやへと急いでゐる
ながいながい 昌慶苑の石垣づたひ
雪がちらついてゐる

しんみりしづかに
雪がちらついてゐる ちらついてゐる
おとうとよ またいとこよ いもうとよ
それはふりかかる きみたちのかたに
たわわな髪のに ひひとして やぶれ帽子のうへに
十ねんわかくなって わたくしも
きみたちと 足なみをそろへてゐる
雪がちらついてゐる

たしか きよねんの十二月八日にも
雪がちらついてゐた あれから一ねん
たたかひはパノラマのやうに
みんなみの海へひろげられていつた
そしてきみたちは ごはんのおいしさをおそはった
またいとこよ いもうとよ おとうとよ
きみたちのうへに 雪がちらついてゐる

雪がちらついてゐる
ながいながい 昌慶苑の石垣づたひ
かくも 季節のきびしさにすなほなきみたちに
あへてなにをか いうべき言葉があらう
雪がちらついてゐる しんみりしづかに
いもうとよ またいとこよ おとうとよ
雪がちらついてゐる 君たちの成長のうへに
ひひとして 雪がちらついてゐる

金鍾漢「待機」(1942)

いかがでしょうか。「ちらついている。雪がちらついている」と言葉を繰り返す中で、こう、雪がちらついている風景がイメージとして見えてくるような感がありま

⁵ 発表者による試訳。

⁶ 発表者による試訳。

す。総督府に近しい人々が絶賛したということが、私から見ると不思議ではあります。なぜかという、最後の方に出てきますけれども、「かくも季節のきびしさにすなほなきみたちに／あへてなにをかいうべき言葉があらう」。子供たちが雪に降られている。かくも季節の厳しさに素直な君たちにあえて何をか言うべき言葉があらう。言うべき言葉がないんです。金鍾漢は言葉を失っているんです。子供たちを見ながら。もちろん、ごはんが美味しいとは書いていますけれども、時代を肯定的に描いた部分はそれぐらいで、素晴らしいとかを書いているわけではない。時代を受け止めつつ、その中で自分の言うべき言葉を失っているわけです。言葉がない。哀しい詩です。私が読むと雪の風景が美しい詩であり、また、哀しい詩でもあると思います。

1940年代の詩をまとめて申しますと、さっきの金光均の詩を見ますと、モダニズムの傾向がある。一方で過去志向があるんですね。「昔にゆこう」とありましたが、1940年代の詩にはこういう過去志向、昔に帰ろうとする詩が多いように思います。それから、伝統的なものへと回帰する。伝統への回帰が強いんです。徐延柱^{ソクエン}という詩人がいますけれども。代表作に「帰蜀道」などがある詩人です。彼はいわゆる親日的な詩を書いたということで批判されていますけれども、一方で伝統的な色彩の濃い詩をいくつか書いています。そういう過去志向や伝統志向が強いんですね。なんでそうかという、理由は簡単で、現在のことを書いたら下手をすると捕まってしまうわけです。詩人たちは通常^{ソウジュウ}の形で今の状況を書けないということです。書こうと思ったら、結局はどこかで体制を賛美しないとイケない。ですからそれに与しない限りは書けないんです。書きたくなかったんでしょう。書けるのは過去のことであり、伝統のことというのが現実的に詩人としてとりうる無難な方向であったと言えるのではないかと思います。

かなり特殊なケースが呉章感の「羊」です。まさに「お前まで動物園に暮らすのか」と直接的に言っているわけです。こうした詩が発表できたことは、かなりまれなケースだったと申しましょうか、詩を諦めなければならなかった彼の最期の叫びでもあったように私は感じています。ここにあるのもやはり哀しみだと思います。外部に向けて何かを訴えろとか、何らかの信念を持ってこの詩を書いたというよりも、そこにあるのは時代を諦めるような、力尽きたような、どうしようもなさであったように思います。

もう一つの1940年代前半期の詩の傾向と言え、内的指向が強いということがあります。悲哀を単純に書いたもの、自虐的な心理がうかがわれるものなどです。逆に言えば、こういう詩は外部のことを書かなくていいという一種の逃避的なところもあるのかもしれませんが。逃避的という点は、以前に東京外国語大学で教えていらした

三枝壽勝先生という方も言及されていたかと思います。

要するに外部のことを書くには、自己検閲をまずは経て、さらに実際の検閲もありますから引っかけやすい内容は避けなければならない。伝統志向と過去志向、それから内面志向というのは1940年代前半期の詩の必然的な方向性だったとも言えるのかもしれませんが。あるいは、その言葉さえも失ってしまったというのが金鍾漢の詩でした。彼には、時代に対して何ら言うべき言葉がみつからなかった。

それでは、尹東柱はどうか。はっきりしていると思います。朝が来るという確信があったわけです。朝が来る、明日がある、という確信がある。これは尹東柱の特徴だと私は思っています。1940年代、正常な文学が不可能な中で、いろんな人がいろんな試みをした。尹東柱は発表はしなかったですけど、結局は彼の特性、特徴というのは朝を待つ、また、その明日を確信するという。1940年代前半期の詩人の中に、こうした新たな時代を見通した詩人は、私を知る限りでは見ることができません。日本を賛美したいいわゆる親日的な詩を除いて、暗黒とされた時代に「新しい明日が来る」なんて書いている人は誰もいませんでした。少なくとも、私は読んだことがありません。尹東柱はまさに次の新しい時代が来ることを確信し、朝が来ることを確信していた。これが尹東柱の評価すべき点であると考えていいかと思います。

彼がその確信へと至る過程、あるいは、愛の世界へと至るその葛藤の過程を私たちはもっと重く考えていく必要があるんじゃないかと思います。というのは愛を失うような時代、皆が死んでいく中で、その死を賛美する時代、文学として大東亜戦争を賛美する文学者がたくさんいた時代でした。戦争ですからそれはある意味で当然のことでもあったかと思います。しかし、戦争に行って兵隊として死んでいく人たちがただ賛美する人たちが大勢を占める中で、自らやるべきことに苦悩し、自らの使命として愛を規定して最後まで自らの節を曲げることなく詩を書き続けた尹東柱は、詩人として素晴らしい存在であったと言えるんじゃないかと思います。

終わりに、一言、二言だけ付け加えさせていただきます。尹東柱の問題として考えなければならないことは、彼の詩の対極にある親日というものをどう考えるかの問題、学徒兵の問題など含めて数多くあると思います。親日の問題、先ほどの金鍾漢の詩「待機」の「雪がちらついている」という詩ですね。彼は親日派と言われています。実際親日的な詩もありますけれども、私から見るとこの人は非常に哀しい詩人に思われます。私は日本人です。日本人ですのでこのような選択をせざるを得なかった人について、どうしてそのようにならざるを得なかったかということ、その苦悩とか、葛藤ということに注目したいと思っています。金鍾漢であれ誰であれ同様です。日本人の中にも「あの人は親日派だった」というように内

心軽くあしらってしまうような人がいないわけではないように思います。しかし、私は日本人はそういう態度を取るべきじゃないと思っています。日本が彼らを結局は傷つけたわけですから。日本の、我々の先輩方、あるいは親世代というのが彼らを傷つけた。そして彼らは親日という道を選ばざるをえなかった。そうして重い荷物を背負う結果になったわけでした。人によってさまざまですが、戦前に積極的に時局に合わせた作品を書いていた人で戦後一切筆を折った人もいるわけです。崔載瑞がそれにあたるでしょう。戦後、創作よりは翻訳作業が中心となる金龍済もそうです。とてつもない重荷を背負い、また葛藤を繰り返して、苦痛を持ち続けて来た人たちに對して、私は申し訳なく思い、またそういう人たちの苦しみとか葛藤に目を向けた研究をしなければならないのだと思っています。尹東柱は時代に一定の距離を置いて自分の道を求めたという意味で重要な存在ですけれども、一方で、時代の圧力の中に巻き込まれ、解放後もずっと苦しみ悩み続けた人たちについても思いを寄せる必要があるのではないかと考えてます。

学徒兵の話、これは余計な話ですけれども朝鮮人学徒兵というのは意外と知られていないようです。あまり知られていないんだと最近思うようになりました。学徒出陣が1943年10月でしょうか。学徒出陣があって、その後朝鮮人学徒兵が戦場に送られています。実質的には強制的な面もあったとも言われています。多くの人が戦場に送られた。尹東柱はもしかしたら生きていたらそっちに行かされていたのかもしれませんが。

いろんな形で傷ついた人が朝鮮にはいるのだと思いを巡らすべきなのだろうと思います。故郷喪失、欠落感というものを考えて、後藤明生の名前を資料にあげさせていただきましたが、これは他でもなく後藤明生という人が植民地期の朝鮮で生まれ育って引揚げを体験した人だからです。いわゆる引揚げ者です。小説を書いた人ですけれども、後藤明生の小説を読むと彼もディアスポラということが浮かび上がってきます。日本人ではあるけれども、故郷が朝鮮半島である作家です。たしか元山だったのでしょうか。そのあたりで生まれ育ってるかと記憶しています⁷。となると彼の故郷は元山なんです。でも、彼の故郷じゃないんです。なぜかという、後藤明生は抑圧者だった。植民地朝鮮において日本人であるということは一種の抑圧者だったという認識が彼の心の中のどこかにあったわけです。積極的に口に出して言えない。加えて引揚げ者に対する差別というものは日本では存在したわけでした。後藤は朝鮮で生まれ育ったということはあまり言わなかったようなんですけれども、小説では書いています。どういう風に見えるかという「べったりと張り付くようなものとして、私の中に朝鮮がある」

と。張り付いているんですね。朝鮮という地が頭の中に張り付いている。喪失した故郷として、べったりと頭の中に張り付いている。もしかしたら、その対極にあるのは尹東柱なのかなとも思います。同じようにディアスポラです。後藤明生も尹東柱もディアスポラで、彼らはともに故郷を完全に欠落していたわけです。尹東柱は、故郷である明東に13年間いましたが、結局は去らざるを得なかったと私は思っています。その後、彼はずっと故郷を失っていた。安定して暮らした場所というのはなかったように思います。故郷を失くしてしまった欠落感というのが肉感的にぽっかりと穴が開いたような状態で尹東柱の中にあっただんじじゃないか。その穴を埋めるべく、彼は自分の使命や生き方を求めて、懸命にその欠落感を埋めて、そこから次の明日を見出していったのではないかと。また、歴史はそうになっていくだろうと確信していたのではないかと。私は尹東柱の詩の底辺に、失った故郷を償わねば耐えきれないような内的欲求、あるいは傷あと、そうしたものがあつたのではないかと考えています。

時間の都合から、かなり中途半端な話になってしまいましたが、ここまでにさせていただきます。ありがとうございました。

(1h30m26s)

(本講演文は講演「尹東柱の詩とその底辺にあるもの」を書き起こしたのですが、文章を読みやすくすべく若干の手を加えています。テープ起こしをしてくださりました西岡健二先生に心からお礼申し上げます。)

[発表レジュメ]

尹東柱の詩とその根底にあるもの

福岡大学 熊木 勉

1. はじめに

- 尹東柱について考えることの意味。時間の経過の中で忘れつつあるもの。
- 暗黒期という時代の中で尹東柱の存在をどうとらえるべきか。

2. 習作期の詩世界

- 外部に対する違和感。→宗教性、明東村を発たねばならなかったこと。
- 自由への希望。→神社参拝に伴う、不安定な自らの位置。虚無意識の中で童謡の創作。
- 外部への違和感と虚無感。故郷喪失と身の置き所の不安定感。

⁷ 講演後に確認したところ咸鏡南道永興郡生まれであった。ただし、元山中学校に通っている。

3. 童謡

- 童心そのものを扱う詩（鄭芝溶の影響も）。→「生」への関心へ（大人の童謡）。
- 日常的、生活的な表現。一方で、幼児退行の要素。
- 童謡を書く契機は複合的。しかし、結局、尹東柱は童謡を書けなくなる。

4. 内的葛藤から詩意識の確立へ

- 1939年2月、白仁俊・姜処重らと同人誌の発行を目指して8月まで合評会。
- 尹東柱は絶望をしていなかった（「慰勞」）。悲観をせずに自らの道を自覚。
- 尹東柱は「生命に参加」した。それは死にゆく者たちへの「愛」に根差すものであった。

5. 尹東柱の詩はなぜ美しいか

- 色彩感覚と空間の広がり。
- 倫理観に根差した自己凝視。→未来（朝・明日）への確信。
- 一方、尹東柱の故郷不在は深刻なものであった。

6. 尹東柱の文学史的な意味

- 尹東柱の評価をどの側面から評価すべきか。→朝・明日の確信に注目すべき。
- 愛へと至る葛藤の過程そのものの重さ。
- 尹東柱の評価は同時代の詩文学の状況との比較の中で可能になる。

7. おわりに

- 尹東柱とともに考えるべきことは、親日の問題、学徒兵の問題など数多い。
- 尹東柱の故郷喪失の欠落感を、より肉感的に考える必要はないか。⇔後藤明生

[参照]

- 美を求めれば求めるほど、生命が一個の価値であることを認める。何となれば美を認めることは、生命への参与を喜んで承認し、生命に参加することに他ならないのであるから。（ウォルド・フランク：尹東柱のメモ）

- 「星を数える夜」（1941.11.5）〔熊本勉試訳〕

季節の過ぎゆく空には
秋でいっぱいになっています。

私は何の心配もなく
秋の中の星たちをみな数えられそうです。

胸の中に一つ、二つと刻まれる星を
もうすべて数えることができないのは
もうすぐ朝が来るからであり、
明日の夜が残っているからであり、
まだ、私の青春が尽きていないからです。

星ひとつに追憶と
星ひとつに愛と
星ひとつにわびしさと
星ひとつに憧憬と
星ひとつに詩と
星ひとつに、母さん、母さん、

母さん、私は星ひとつに美しいことばをひとつづつ呼んでみます。小学校のときに机をともした子供たちの名と、佩、鏡、玉、こうした異国少女らの名と、すでに子を持つ母となった女の子たちの名前と、貧しい隣人たちの名と、鳩、子犬、兎、驪馬、犛、フランス・ジャム、ライナー・マリア・リルケ、こうした詩人の名前を呼んでみます。

これらはあまりに遠くにいます。
星がはるかに遠いように、

母さん、
そして、あなたは遠く北間島にいらっしゃいます。

私は何だかなつかしく、
このたくさんの星の光の降りそそぐ丘の上に
私の名前を書いてみて、
土でかぶせてしまいました。

なるほど、夜通し鳴く虫は
恥ずかしい名前をかなしむからです。

しかし、冬が去り、私の星にも春が来れば
墓の上に青い芝が生え出ずるように
私の名の埋められた丘の上にも
誇りのように草が生い茂ることでしょう。